

桜蔭俳話会 四月句会 (第三六四回)

平成三十年四月二十二日(日)

鑑賞

揉むほどに潮の匂ひや新若布 幸

夜桜や秘境の駅のラストラン 明美

寄せる波春の光を乗せて引く 邦子

花びらをそおつと踏むや小学生 ヤエ子

初蝶の道案内や文士村 友子

婆二人次の花見を約し合ふ 眞壽

をさなごのひそひそばなしまめのはな

かほる

アネモネや少女の夢は日々変はる 友子

原句 婆の手より受くさくら貝と砂つぶ

友子

添削案 婆の手の砂にまみれし桜貝

原句 ゴムの木や新芽赤いは強さかな 直子

添削案 ゴムの木の赤き新芽の靱さかな

(文責代表 増田守 欠席投句：古野明美、京林眞

壽、松浦かほる)

添削

原句 八十路なほ行動疾し若緑 ヤエ子

添削案 八十路には疾き動きや若緑

原句 春愁やバッグに過去をびつしりと

才美

添削案 春愁や過去のつまりしデイバック

原句 焦点のなき生き方や陽炎へり ヤエ子

添削案 生き方に焦点ひとつ陽炎へり

原句 辛夷咲く曇り硝子の通りかな かほる

添削案 花辛夷曇り硝子の通り道

原句 風をよみ空の高みへしじみ蝶 幸

添削案 風よみて空の高みへしじみ蝶

原句 花を見るその数だけの生きる様 ヤエ子

添削案 生き方は人の数だけ花吹雪

原句 囀りの遠き一羽とバスを待つ 才美

添削案 囀の遠きひとつとバスを待つ

原句 葱坊主今太陽は青年期 才美

添削案 葱坊主太陽はなほ青年期

原句 春潮の藍を見下ろす晶子 友子

添削案 春の潮みおろす丘の晶子の碑

原句 遂にきた空き地一面仏の座 直子

添削案 いつまでの空き地なりしや仏の座

原句 二人居てそれぞれの私語若葉風 才美

添削案 二人ゐてそれぞれの詩語若葉風

原句 いつの世も刀筆の吏や春霞 かほる

添削案 いまもなほ刀筆の吏や春の塵

原句 日溜まりの沈丁花の香漂える 邦子

添削案 日溜まりや沈丁の香の漂へる